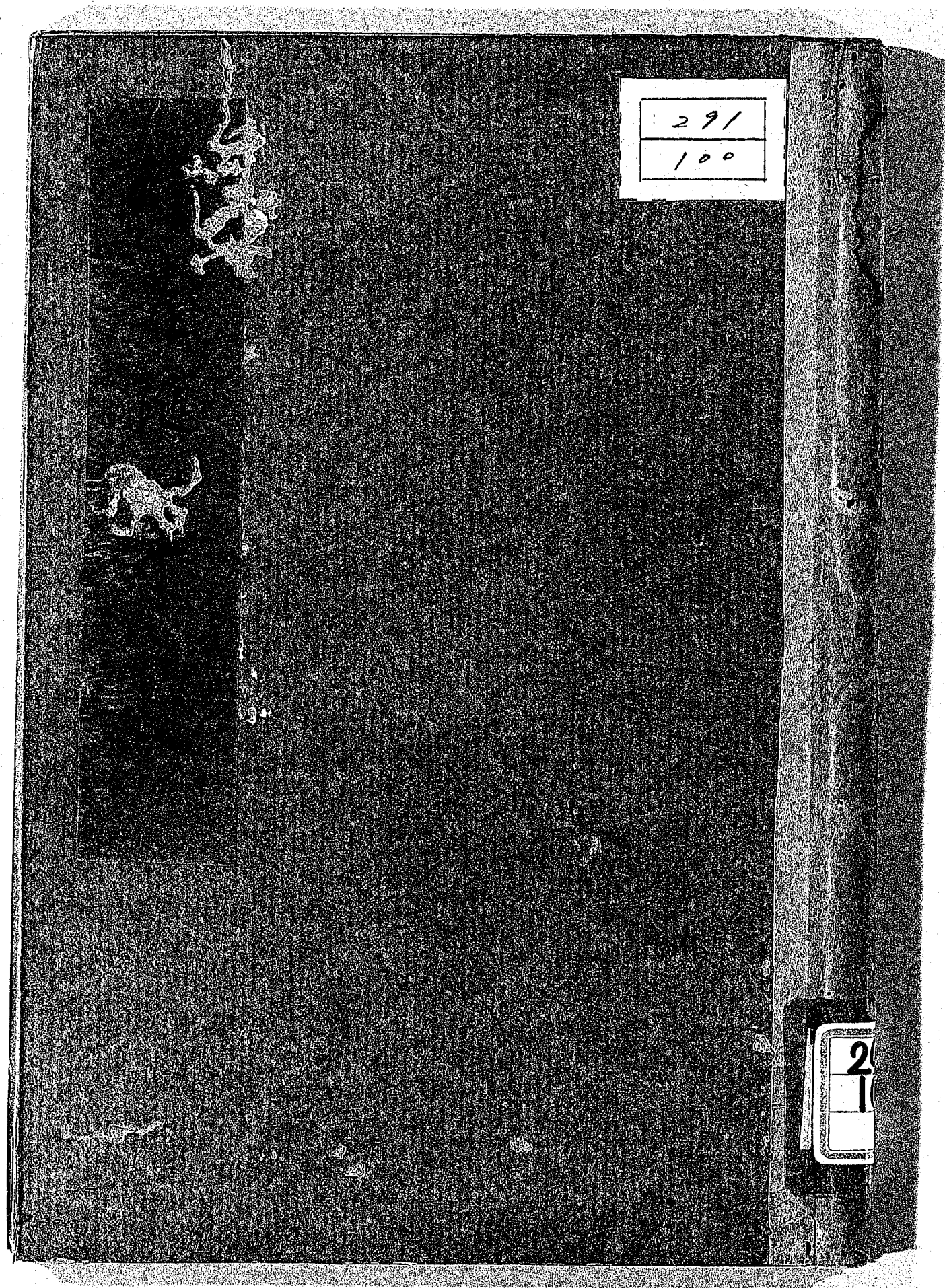




291
100

291

璜屋随筆

291

100

291

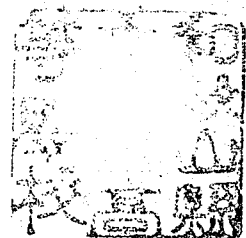
291
100
1

中根七郎
贈



璣
屋
隨
筆

葛
八
編



瑞至隨筆第八節目次

- 一 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二 古歌を詠する事
- 三 三宮御祭夕暮の事
- 四 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 五 長歌とよけのめたる歌をよ
- 六 大歌、三任か歌
- 七 新島お新編神楽
- 八 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 九 四季のはな
- 一〇 撫軍新作歌
- 一一 盆石の歌
- 一二 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一三 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一四 古歌を詠する事
- 一五 三宮御祭夕暮の事
- 一六 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一七 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一八 大歌、三任か歌
- 一九 新島お新編神楽
- 二〇 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二一 四季のはな
- 二二 撫軍新作歌
- 二三 盆石の歌
- 二四 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二五 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二六 古歌を詠する事
- 二七 三宮御祭夕暮の事
- 二八 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二九 長歌とよけのめたる歌をよ
- 三〇 大歌、三任か歌
- 三一 新島お新編神楽
- 三二 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 三三 四季のはな
- 三四 撫軍新作歌
- 三五 盆石の歌
- 三六 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 三七 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 三八 古歌を詠する事
- 三九 三宮御祭夕暮の事
- 四〇 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 四一 長歌とよけのめたる歌をよ
- 四二 大歌、三任か歌
- 四三 新島お新編神楽
- 四四 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 四五 四季のはな
- 四六 撫軍新作歌
- 四七 盆石の歌
- 四八 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 四九 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 五〇 古歌を詠する事
- 五一 三宮御祭夕暮の事
- 五二 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 五三 長歌とよけのめたる歌をよ
- 五四 大歌、三任か歌
- 五五 新島お新編神楽
- 五六 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 五七 四季のはな
- 五八 撫軍新作歌
- 五九 盆石の歌
- 六〇 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 六一 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 六二 古歌を詠する事
- 六三 三宮御祭夕暮の事
- 六四 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 六五 長歌とよけのめたる歌をよ
- 六六 大歌、三任か歌
- 六七 新島お新編神楽
- 六八 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 六九 四季のはな
- 七〇 撫軍新作歌
- 七一 盆石の歌
- 七二 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 七三 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 七四 古歌を詠する事
- 七五 三宮御祭夕暮の事
- 七六 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 七七 長歌とよけのめたる歌をよ
- 七八 大歌、三任か歌
- 七九 新島お新編神楽
- 八〇 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 八一 四季のはな
- 八二 撫軍新作歌
- 八三 盆石の歌
- 八四 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 八五 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 八六 古歌を詠する事
- 八七 三宮御祭夕暮の事
- 八八 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 八九 長歌とよけのめたる歌をよ
- 九〇 大歌、三任か歌
- 九一 新島お新編神楽
- 九二 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 九三 四季のはな
- 九四 撫軍新作歌
- 九五 盆石の歌
- 九六 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 九七 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 九八 古歌を詠する事
- 九九 三宮御祭夕暮の事
- 一〇〇 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一〇一 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一〇二 大歌、三任か歌
- 一〇三 新島お新編神楽
- 一〇四 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一〇五 四季のはな
- 一〇六 撫軍新作歌
- 一〇七 盆石の歌
- 一〇八 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一〇九 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一一〇 古歌を詠する事
- 一一一 三宮御祭夕暮の事
- 一一二 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一一三 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一一四 大歌、三任か歌
- 一一五 新島お新編神楽
- 一一六 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一一七 四季のはな
- 一一八 撫軍新作歌
- 一一九 盆石の歌
- 一二〇 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一二一 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一二二 古歌を詠する事
- 一二三 三宮御祭夕暮の事
- 一二四 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一二五 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一二六 大歌、三任か歌
- 一二七 新島お新編神楽
- 一二八 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一二九 四季のはな
- 一三〇 撫軍新作歌
- 一三一 盆石の歌
- 一三二 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一三三 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一三四 古歌を詠する事
- 一三五 三宮御祭夕暮の事
- 一三六 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一三七 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一三八 大歌、三任か歌
- 一三九 新島お新編神楽
- 一四〇 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一四一 四季のはな
- 一四二 撫軍新作歌
- 一四三 盆石の歌
- 一四四 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一四五 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一四六 古歌を詠する事
- 一四七 三宮御祭夕暮の事
- 一四八 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一四九 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一五〇 大歌、三任か歌
- 一五一 新島お新編神楽
- 一五二 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一五三 四季のはな
- 一五四 撫軍新作歌
- 一五五 盆石の歌
- 一五六 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一五七 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一五八 古歌を詠する事
- 一五九 三宮御祭夕暮の事
- 一六〇 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一六一 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一六二 大歌、三任か歌
- 一六三 新島お新編神楽
- 一六四 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一六五 四季のはな
- 一六六 撫軍新作歌
- 一六七 盆石の歌
- 一六八 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一六九 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一七〇 古歌を詠する事
- 一七一 三宮御祭夕暮の事
- 一七二 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一七三 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一七四 大歌、三任か歌
- 一七五 新島お新編神楽
- 一七六 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一七七 四季のはな
- 一七八 撫軍新作歌
- 一七九 盆石の歌
- 一八〇 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一八一 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一八二 古歌を詠する事
- 一八三 三宮御祭夕暮の事
- 一八四 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一八五 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一八六 大歌、三任か歌
- 一八七 新島お新編神楽
- 一八八 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 一八九 四季のはな
- 一九〇 撫軍新作歌
- 一九一 盆石の歌
- 一九二 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 一九三 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 一九四 古歌を詠する事
- 一九五 三宮御祭夕暮の事
- 一九六 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 一九七 長歌とよけのめたる歌をよ
- 一九八 大歌、三任か歌
- 一九九 新島お新編神楽
- 二〇〇 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二〇一 四季のはな
- 二〇二 撫軍新作歌
- 二〇三 盆石の歌
- 二〇四 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二〇五 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二〇六 古歌を詠する事
- 二〇七 三宮御祭夕暮の事
- 二〇八 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二〇九 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二一〇 大歌、三任か歌
- 二一一 新島お新編神楽
- 二一二 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二一三 四季のはな
- 二一四 撫軍新作歌
- 二一五 盆石の歌
- 二一六 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二一七 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二一八 古歌を詠する事
- 二一九 三宮御祭夕暮の事
- 二二〇 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二二一 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二二二 大歌、三任か歌
- 二二三 新島お新編神楽
- 二二四 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二二五 四季のはな
- 二二六 撫軍新作歌
- 二二七 盆石の歌
- 二二八 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二二九 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二三〇 古歌を詠する事
- 二三一 三宮御祭夕暮の事
- 二三二 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二三三 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二三四 大歌、三任か歌
- 二三五 新島お新編神楽
- 二三六 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二三七 四季のはな
- 二三八 撫軍新作歌
- 二三九 盆石の歌
- 二四〇 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二四一 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二四二 古歌を詠する事
- 二四三 三宮御祭夕暮の事
- 二四四 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二四五 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二四六 大歌、三任か歌
- 二四七 新島お新編神楽
- 二四八 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二四九 四季のはな
- 二五〇 撫軍新作歌
- 二五一 盆石の歌
- 二五二 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二五三 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二五四 古歌を詠する事
- 二五五 三宮御祭夕暮の事
- 二五六 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二五七 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二五八 大歌、三任か歌
- 二五九 新島お新編神楽
- 二六〇 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二六一 四季のはな
- 二六二 撫軍新作歌
- 二六三 盆石の歌
- 二六四 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二六五 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二六六 古歌を詠する事
- 二六七 三宮御祭夕暮の事
- 二六八 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二六九 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二七〇 大歌、三任か歌
- 二七一 新島お新編神楽
- 二七二 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二七三 四季のはな
- 二七四 撫軍新作歌
- 二七五 盆石の歌
- 二七六 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二七七 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二七八 古歌を詠する事
- 二七九 三宮御祭夕暮の事
- 二八〇 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二八一 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二八二 大歌、三任か歌
- 二八三 新島お新編神楽
- 二八四 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二八五 四季のはな
- 二八六 撫軍新作歌
- 二八七 盆石の歌
- 二八八 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ
- 二八九 了らるる石すゝと墓前さまとの別ある事
- 二九〇 古歌を詠する事
- 二九一 三宮御祭夕暮の事
- 二九二 六乙卯と妙ふとけやす歌
- 二九三 長歌とよけのめたる歌をよ
- 二九四 大歌、三任か歌
- 二九五 新島お新編神楽
- 二九六 南原村があつたる村舎の歌をよとけ
- 二九七 四季のはな
- 二九八 撫軍新作歌
- 二九九 盆石の歌
- 三〇〇 蓮田又子か紫雲とてお新と鈴よの御園とて七葉の事とあつたる歌とてふれ

三
山
子
山
下
新
方

字并可通遺稿

陣を不意に打ちしほむとの計あり、居たす花よりつらきよめるを敵にたすきた
 り、格闘敵んとする時といふ、又某調する花よりつらきよめるは、格闘はほんとするけ
 をいふなり、格闘をよめる、某敵のあやまりするをよめる面白き故あり、たとふ格闘の
 こそ思ふ、雪のあやまりかとおもふ、一は雪のつらきかとおやまる、思ふれも、たよまる
 花といふ、又ちりやあやまりたきは、おとよせよとつらき、ちりけは題を設けよとよまるが
 り、又一はあやまりは、ほろけ、こほれ、居るを、又まゝつらきとの別あり、又某調する花
 におつけは格闘とよめるはあたらしき事なり、されといふ一人は、思おほらるゝあやまりをもち
 とよめしもあり、某事と某調とわけあり、あやまいせん、これどよと命を請へたるは
 あらされず、おとよめたりぬ、いとおもひ、それは某地よりこそを修し新ふすべし
 梅、桜、桃、梨のわたりかゝる、さきの面白きは、都の軒まが故あり、牡丹前もちる花は、
 かり、さし、おとよめ、たよめて、重けれも、ちる雪を、はるたり、詞を佳く面白く、大臣牡丹

三十一
すうちう屋さすも見一にとお花のゆとろはつかほおけり
るすちうけあまを見しあんだかゝる二つの目を三つとみるを落れさなめいふあふまた

古今集傳之石印山崎

川つて井のふちより井のさかへあはせよとて

これより先は、後述の如く、
「花をいへば」

董杜若生古山花多、うゝふは、ほめたき、さるなり
六帖に地盤之切居杜若也

[illegible]

うんげんとくふかたさ

踏躑はうふふ後、居てもあやれと大方は一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

醉木下、一の藪に在り、
古竹を以て之を
知る

玉座のうしろの油のうしろに
一丁の石のうしろにあり

[illegible]

金步。子。

上
下
左
右
前
後
東
西
南
北

王、よ、か、た、う、と、う、

卷之六 一 乃乃集子 新勅撰集子 新勅撰集子 新勅撰集子

老望川新の
老根の葉の花、
手折てかたむ
けはくとも

歌ハトキキと云い申れと、手折んといふは、手多折なる事なり。すてかつ

立

らな、木のてく、まゝ折れさすのみあるや、半にそめてたゞみかりともおぼされは、
 けふの世、手折えといふ、厚れたるもさへあり、折してを由るといふ、持あつて
 即ち花か、うつろひを懐くとはなれど、あらう、ちつけぬ花とちぢぬは異かだ、五月雨、水
 のなくなどといふは、言草なり。

標、楊子ふふふと、學教す所、標はちるををわくあり、また標のうた

[illegible]

三

目下、三々一に多くあり
若かりしときより、和菜十二歳、知事

1. 土工
 2. 土木
 3. 土木
 4. 土木
 5. 土木
 6. 土木
 7. 土木
 8. 土木
 9. 土木
 10. 土木
 11. 土木
 12. 土木
 13. 土木
 14. 土木
 15. 土木
 16. 土木
 17. 土木
 18. 土木
 19. 土木
 20. 土木
 21. 土木
 22. 土木
 23. 土木
 24. 土木
 25. 土木
 26. 土木
 27. 土木
 28. 土木
 29. 土木
 30. 土木
 31. 土木
 32. 土木
 33. 土木
 34. 土木
 35. 土木
 36. 土木
 37. 土木
 38. 土木
 39. 土木
 40. 土木
 41. 土木
 42. 土木
 43. 土木
 44. 土木
 45. 土木
 46. 土木
 47. 土木
 48. 土木
 49. 土木
 50. 土木
 51. 土木
 52. 土木
 53. 土木
 54. 土木
 55. 土木
 56. 土木
 57. 土木
 58. 土木
 59. 土木
 60. 土木
 61. 土木
 62. 土木
 63. 土木
 64. 土木
 65. 土木
 66. 土木
 67. 土木
 68. 土木
 69. 土木
 70. 土木
 71. 土木
 72. 土木
 73. 土木
 74. 土木
 75. 土木
 76. 土木
 77. 土木
 78. 土木
 79. 土木
 80. 土木
 81. 土木
 82. 土木
 83. 土木
 84. 土木
 85. 土木
 86. 土木
 87. 土木
 88. 土木
 89. 土木
 90. 土木
 91. 土木
 92. 土木
 93. 土木
 94. 土木
 95. 土木
 96. 土木
 97. 土木
 98. 土木
 99. 土木
 100. 土木

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

(Faint handwritten notes or bleed-through from the reverse side)

蓮の花は、節々ありと、金糸がなめくさる。のりたて、十

ふとち(け)は心をよる。乃よ見られたらす。且下三

蓮葉の石と、葉をさへあふは、誰か、多し。一箇か、著る甚し。月日、

つゝのぢふゝ、いふあけつゝふかたレ

[illegible]

また金沢の海は大増え、長遠一壘を攻めたり、父子生る時、各小舟に解世の中や衆
王を左翼

さきぢぬくひやちひか新筆な流るゑのやくみぬあり

とありやうなも、後援書集が各町部より、秋風にあふたまにさうなうた。小野、さ
かたぬくいやらなるの周知となり、此よりすなはち案のなり、いづれ力加をきりか
しめ。

一、

新寧死す太田道灌公歿の時、その家倒へけ鐸の柝に取付て

わづとちをいひあひしらぬかおそたきとあひしらぬ

とうたり中落御幸良親王の手指を以て「まのたぬ世のため何かしからん様ぞ、か
 ひぢのち御せといとまはれん一歩踏かへともおやうあり、遠海吾儕川群、小
 舟千原と申しとる衆むたり、よきおれはあらぬれども、さうぞくもあきそく侍

郡士松尾三平下流持筆無一八七三年二君元年冬、高濱合衆村、中村治部少
輔、高濱會館より、松尾三平に對して、道徳上の戒めを述べ、ついで、手向をすすめ、
此より後、善行を積み、道徳上の戒めをすすめ、ついで、手向をすすめ、

三
家
鄉
秋
夕
歌
事

新古今集。此集の終りのうたとて

身濟せたるは善いなりけし御のとまひの程の由なり

言葉のうたを世にまはしめたりぬれども、おのけなすもあてはぬなり、これ何事と云ふ春の花
 と秋の紅葉となり、秋の八千子の花をあらす、さじき花と秋の葉くわいのあやめと
 いともいへない言ひならぬなり、詩うたを中居ぶる長さを現すあり、また甲斐子等の
 部 大上天皇御製家

部 大上天下張製

このころはたゞ紅葉も桜も新緑も
あつた

には言はれぬお世給ふ事をも、いづくおはしなく秋りたるまじりぬ、新のうらぐさといふ人
 にあはれぬお世給ふ事をも、いづくおはしなく秋りたるまじりぬ、新のうらぐさといふ人
 あり、世の三日月のうらた、おはしなく秋りたるまじりぬ、新のうらぐさといふ人

おはまた秋のふかし、すき通し、わたる月のせうをみかた

とうたこそ結構の得物なり、
 はるく一着のこぬくをまうはの海といふたより、
 このふたより

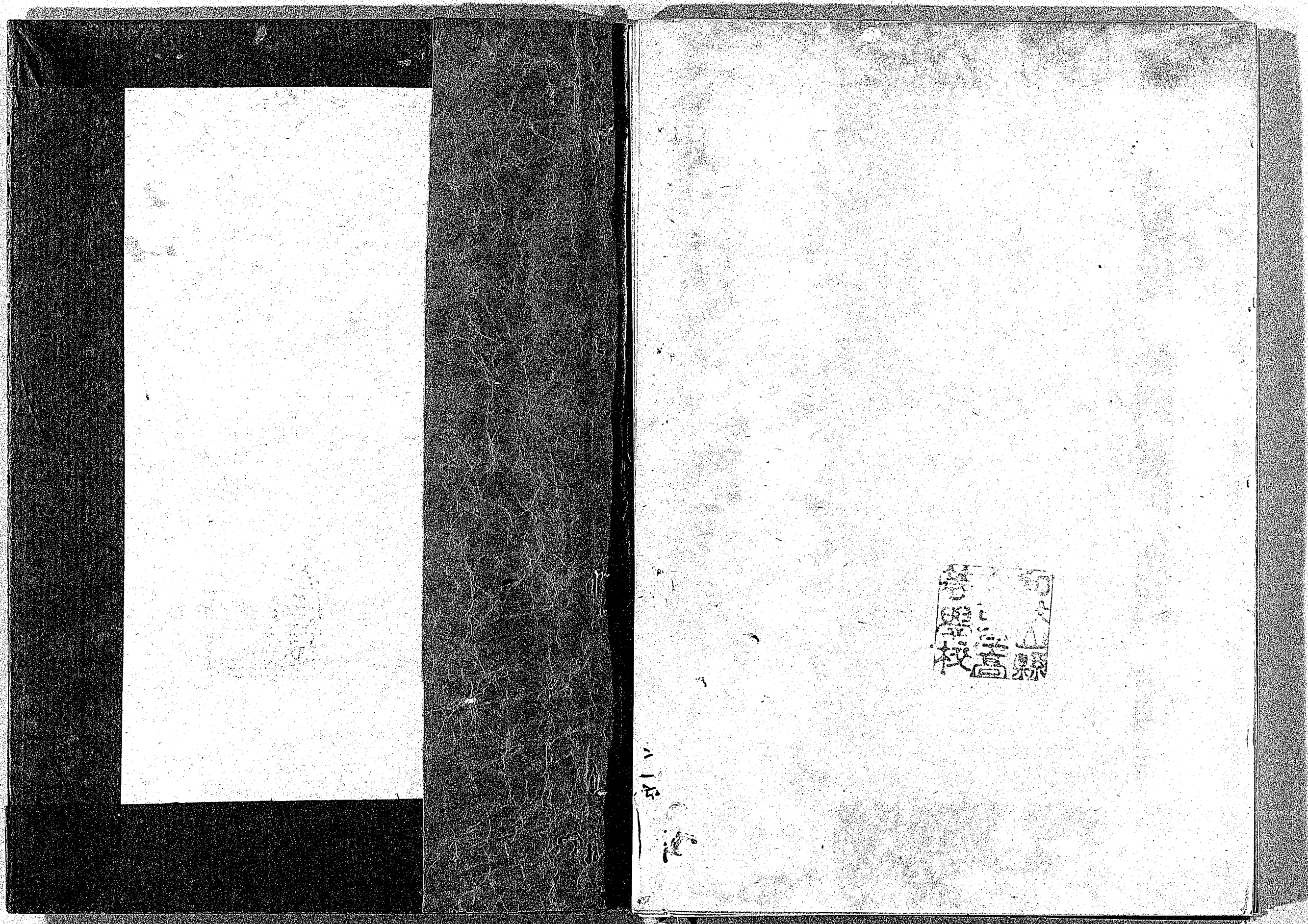
四、五、六、七、八、九、十

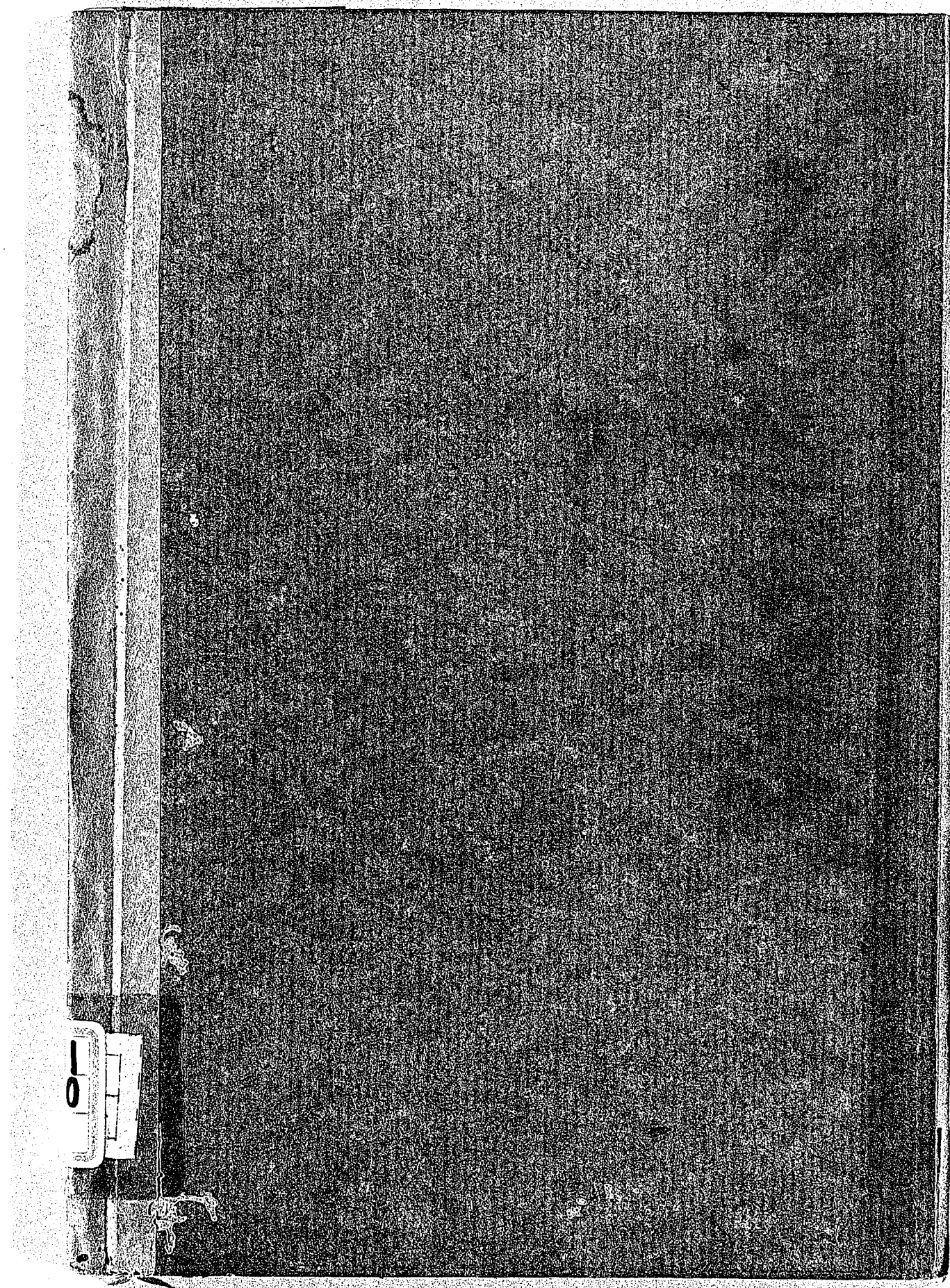
射とめてた水はくはん山溪の花のしゆえに井戸の玉に

新古今集卷之八 天保成綿之禍 相良郡 升冬の旦 玉引の山崎よりあり

土事兼
改訂
款
一
寄
原
子
月
宣
り
付

古書學子信新加坡近江陸栗衣新改修の玉竹水上月也小倉新





10